

活動報告：ぶんぶんクラブ

1 「ぶんぶんクラブ」のねらい

平成27年度から子ども子育て支援新制度が本格的にスタートする。これまで我が国では、高まる子育て支援ニーズに応えるべく、さまざまな支援制度を確立してきた。このたび、施行される新制度もこの流れをくむものではあるが、これまでより一層、妊娠・出産から育児まで切れ目のない支援を行うことを目的としている。

この切れ目のない支援ということを念頭においたとき、待機児童の解消や預かり保育の充実といった地域の中で乳幼児期の親子を支えることはもちろんのこと、学童期の子どもの放課後を保障し親子を支えていこうという放課後児童クラブ充実への動きもますます加速していくものと予想される。その際、単に親が子どもを預ける場所が増えるだけでなく、「子どもの最善の利益」が実現される社会を目指していくことがこの制度の大切な視点である。これから子どもを産み育ててであろう若者世代が、子育てへのサービスばかりを求めるのではなく、子育てしやすい地域づくりとは何かを考え続け、自らも地域の子どもたちを育てる一員となることが長期的に必要な取り組みであろうと思われる。

本学で取り組む「ぶんぶんクラブ」は、こうした新制度の流れを鑑み、地域の子どもたちと大学生が日常的に触れ合うことで、子育てしやすい地域づくりを地域の人々と共に考えていくことを目的としたものである。

具体的には、幼児は、幼稚園の保育中および園庭開放がおこなわれる午後2時以降から夕方、児童は、学校時間外の夕方の保護者の帰宅を待つ間、大学生とふれあう時間を持つ。「ぶんぶんクラブ」のこうしたふれあい活動は、子どもたちに大学生との遊びや勉強を通じて充実した夕方の生活を提供し、大学生に子どもたちとの日常的なふれあいを通じて子ども・子育てへのリアリティの体感・教育的視点を提供している。

また、「ぶんぶんクラブ」の活動は、地域の子どもたちと大学生がふれあうことで、学校を中心とした地域社会が開かれたものになるとともに、子どもや青年、様々な世代と一緒に子育てしやす

い地域づくりを模索していくことをめざしている。

2 「ぶんぶんクラブ」の活動状況

「ぶんぶんクラブ」では、1で記したねらいのもと、ボランティア学生とりわけレクリエーション・ボランティア研究会のメンバーを中心に、地域の幼稚園や児童館、公民館などとの交流活動を展開している。1年間の主な活動状況を以下に示す。

- ・児童館との交流：年間40回程度（宿題指導、遊び、卓球指導、一輪車指導など）
- ・幼稚園との交流：年間20回程度（保育補助、遊びなど）
- ・幼稚園・児童館・公民館などでの出前劇（七夕やクリスマスなど）

3 ボランティア学生の変化

2の「ぶんぶんクラブ」の活動の中で、ボランティア学生は活動後、活動記録の記入およびカンファレンスを行っている。学生の記入内容、およびカンファレンスでの発言内容を時系列にみると、一昨年度から2年の間に、「子どもの状況」→「子どもの変化や特徴」→「自分の感情」→「子どもと自分との関係性」→「関係性の中での言葉がけについての分析」へと変化していることがわかった。さらに今年度は、「安全面への配慮」「教育的支援のあり方」について言及することも多々あり、学生たちが子どもたちとの関係性から教育的配慮を考えるように変化していった様子が伺われた。

学生たちの記述の一部を以下に紹介する。

【学生の活動記録より】

- ・子どもの宿題中の私語をどのように注意すべきか話し合う必要がある。
- ・スタッフが散らばっていた方が子どもたちの様子をしっかりと観察でき、安全に配慮できると思った。
- ・周りの子どもたちと協力しあえるよう、声をかけた方がよかった。
- ・一輪車の大きさに気をつけ、安全に遊べるように気を配るべきだと思った。
- ・なわとびに夢中になっているとき、なわとびの正しい持ち方をどのタイミングで教える方

がいいのか、話し合う必要がある。

- ・一輪車が上達している子をもっとほめるべきだった。
- ・ルール説明に加えて、大学生が例を示せばもっとわかりやすく取り組めると思った。

これらの記述のように、学生は長期的で日常的な交流により、子どもとの楽しいふれあいだけでなく、子どもと共に成長し、教育的支援を模索できる関係性を構築していったことが伺えた。

以上のことから、「ぶんぶんクラブ」の活動によって、大学生は、単なる子どものかわいらしさや楽しさを知るだけでなく、よりリアリティを持った子どもの教育への感覚を培っていったことが示唆された。

4 今後の課題と将来構想

現在、地域の児童館や幼稚園、公民館のご協力のもと積極的な交流が行われている。学生と子どもたちとの関係性も長期的で継続的なものになりつつあり、地域の中で子どもたちと大学生がつながっていくというねらいの初期段階を達成していったように思われる。

ただし、様々な世代が子どもや青年と共に子育

てしやすい地域づくりを模索するという目的を達成するためには、今後に向けてさらなる発展的な課題が必要となるだろう。

例えば、大学・小学校・幼稚園を中心に地域の安全が確保され、その上で学校が地域に対してオープンな施設となり、多様な世代の交流を促進していくことも大切な課題である。オープンな学校に地域の様々な世代が集っていったならば、乳幼児期に限らず児童期・思春期・青年期といった縦断的な期間で、地域の多くの見守り手を利用した切れ目のない子育て支援をすることが可能となっていこう。

新制度のもと、子どもの最善の利益が実現される地域社会を目指し、子どもの年齢に限らず常に親子へあたたかいサポートが向けられる地域を築くことができたならば、そこで育った次世代の大学生は、その地域のあたたかさに魅力を感じ子どもを産み育てたいと考えていけるのかもしれない。『子育てしたくなる地域づくり』へ、大学が子育ての魅力を次世代に伝える役割を果たしながら、地域づくりへ一役担うことができればと考える。

(文責：学芸学部 子ども学科 若林 紀乃)